

マタイ8章「イエスのことばの権威」

1A 癒しにおける現われ 1-17

1B 貧しき者たちへの救い 1-17

1C 汚れた者 1-4

2C 神から離れた者 5-13

3C 女 14-15

2B 身代わりの病 16-17

2A 向こう岸 18-34

1B 弟子の問題 18-22

2B 闇に対する力 23-34

1C 荒波 23-27

2C 悪霊 28-34

本文

マタイによる福音書8章を開いてください。イエス様が山上の垂訓を語り終えられました。イエス様が語られていたことは、単なる良い教えではなく、私たちの生活や世界観が根本から変えられる天の御国の宣言でした。自分自身が王であったところから、イエスが王となる世界に入ることあります。そこでイエス様が、働きを行われます。様々な奇蹟を読みますが、それがイエス様の言葉の命令によって行われていることに注目してください。ここが、イエス様の宣教が単なる言葉によるものではないことを示しています。実体があり、それを後追いするように言葉があります。言葉だけあって、実体がなく、力がなければ、そこにはイエス様がおられません。パウロは、コリント人たちに、「Iコリ 4:20 神の国は、ことばではなく力にあるのです。」と言いました。私たちが、イエス様を信じた時、何が証しになったかを思い出せないでしょうか？もし、イエス様のことだけを言葉で聞いていたら、宇宙語であり、さっぱり分かりません。けれども、実体があるから、変えられた人生であるとか、平安であるとか、愛や喜びがあるから、それでこれを信じようとなるはずです。これが、神の国を見たことになるのです。

1A 癒しにおける現われ 1-17

1B 貧しき者たちへの救い 1-17

そして1節から17節までに、三人の者が癒しを体験する場面が出てきます。それぞれが、「疎外されている」ということが言えます。初めは、らい病人、次に百人隊長、それから女です。

1C 汚れた者 1-4

1 イエスが山から下りて来られると、大勢の群衆がイエスに従った。2 すると見よ。ツアラアトに冒

された人がみもとに来て、イエスに向かってひれ伏し、「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります」と言った。3 イエスは手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐに彼のツアラアトはきよめられた。

山から降りられると、大勢の群衆がイエス様についていきました。ついて行っていますが、その中で著者マタイが目しているのは、「ツアラアトに冒された人」です。新改訳第二版までは、「らい病」と訳されていました。今はハンセン病と呼ばれますが、レビ記を見ますと、その言葉ツアラアトが、いわゆるハンセン病だけに限らず、疥癬など他の重い皮膚病もあり、また壁などにもできることが書かれているのですが、それはカビであります。ぜひ、レビ記 13-14 章の学びを、後でロゴス・ミニストリーでお聞きになるか、お読みください。

それで、らい病に限らないのでヘブル語の言葉をそのまま使って訳しているのですが、けれども、その症状については、いわゆる「らい病」のそれを見れば、よく分かります。その大きな特徴は、「潜行性」があるということです。潜行の「潜」とは、潜水艦の潜であり、潜る意味です。そして行は、進行するということです。つまり、一時期、表面に症状が出て来るのですが、非常に厄介なことにそれがまるで直ったかのように潜ってしまうのです。それで、ある一定期間、潜ったまま体で悪さをします。そしてまた出て来て、その時には広がった状態で体を蝕むのです。それが、まさに私たちの内側にある汚れをよく表しています。罪として、初め、少し認識されるものがあります。けれども、それほど大きな悪影響が出ているとは思われません。大したことがないと思います。ところが、その隠れた罪は私たちの生活の全体を蝕みます。そして、明らかにされた時はどうしようもない状態になっている、というものです。

そこで、主はこれを汚れたものとししました。そして、らい病の患者は「汚れている！」と叫ばなければいけません。「患部がツアラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。(13:45)」このようにして、らい病人はイスラエルの宿営には住むことができず、一人で住まなければいけませんでした。覚えていますか、四人のらい病人がサマリヤの町の外に住んでいました。サマリヤの中が、食べ物がなかったのも、ごみ捨て場のところにも残飯がやって来ないで、彼らも飢餓状態になりかけていたという話がありました。この男が、イエス様に近づいてきたところからマタイは、山上から降りてきた時の話を始めているというところに神の御心があります。天の御国は、私たちの弱さ、いや汚れ、罪を持っている私たちに神が触れてくださる、というところから始まるということです。ああ、自分はもうだめだと思った時こそが、イエス様の癒しの御手が置かれる一歩手前なのです。

長血を患った女が近づいた時もそうでしたが、大勢の群衆がイエス様について行っているのに、らい病患者は近づきました。これには勇気が要るでしょう、本来離れなければいけない人々です。しかし、強い意志をもって近づきました。イエス様は 7 章で言われましたね、「求めなさい」と。そし

て、「主よ」と呼んでいます。生活の全てにおいて、この方を主としているということです。先生のような尊敬すべき方だけではありません。自分の存在の全てが、この方のものという宣言です。そして、「お心一つで私をきよくすることがおできになります」ということですが、イエス様が清めることはできる、ということです。彼には清めることができる、という信仰がありました。しかし、この方が自分自身を清めたいと願っておられるか、定かではありませんでした。これは不信仰の表れではありません。イエスが主であられるなら、この方がすべて清めるかどうかをお決めになるのです。イエスが全てを掌握されていることを認める信仰の表れです。そして、イエス様は、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われます。イエス様は、らい病に表されている、罪の汚れからの清めをいつも願われておられます。喜んでそれを行いたいと願っておられます。

そしてここで驚くべきことは、「手を伸ばして彼にさわら」というところです。らい病人に触れれば、その人はその汚れが移されて、汚されることとなります。けれども、イエス様が触れれば、逆に清さがそのらい病に移り、それで清められるということです。そうです、イエスが単なる人間ではないということです、神から来た方。神と一つである方であることを示しています。

興味深いことに、レビ記 14 章のらい病についての律法において、らい病人が清められた時に彼が何をしなければいけないかが書かれているのですが、肝心のどうすれば清められるかについては書いていないことです。このことについては沈黙であり、事実、イエス様がナザレの会堂で語られた時に、ナアマンのことについて言及されました。シリア人ナアマンは清められたけれども、イスラエルの中には数多くのらい病患者がいたけれども、「その中のだれもきよめられることはなく(ルカ 4:27)」と書いてあるのです。ですから、清められた後にどのように神の共同体の中に入れるかの手続き、儀式について啓示されているけれども、肝心の清められることについては、律法の中でも歴史の中でも、明らかにされていなかったということです。ですから、イエス様がらい病人を清められたということは、まさに「神の訪れ」そのものでありました。神のキリストによって、律法にはできないことを実現してくださったのです。

4 イエスは彼に言われた。「だれにも話さないように気をつけなさい。ただ行って自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのために、モーセが命じたささげ物をしなさい。」

レビ記 14 章に、祭司に見せる手続きが書いてあります。それは、ものすごい長い手続きであり、けれども完全に回復し、回復するだけでなく、主に心からお仕えする恵みまでが書かれています。二羽の小鳥の一羽を屠り、その血を水の中に浸します。その中に杉の木と緋色の糸を入れていきます。そしてもう一羽の生きていた小鳥をその中に入れて、そこから解き放ちます。これが、イエス様の十字架と甦りを示していることは明らかです。木につけられて血を流されたイエス様。けれども、その血こそが罪の清めを行う力があり、そしてイエス様は甦られました。そして、いけにえを八日目に捧げて、さらに血を取って、その人の右の耳たぶ、右手の親指、右足の親指にそれを塗るの

です。また油もそこに塗ります。これは、祭司が奉仕をする時の儀式そのものです。らい病人であったものが、イエス・キリストの流された血、また甦りの力によって、清められただけでなく、その恵みによって神に仕え、礼拝奉仕ができるようにまで回復されるのです。

ここでイエス様が、「だれにも話さないように気をつけなさい。」というのは、そのためです。イエス様が行われたことの意義が、ただ人々に言い広められることによって失われてしまうことのないためです。祭司に見せることによって、確かにこれが神によって行われて、あなたがイスラエルの共同体の中に入ることができることによって、神の証しを立てなさいと言われていています。私たちにも必要なことです。イエス様によって変えられたという事実を、社会の中で、家庭の中で、慎み深く、しかし力強く示すことによって、事実、イエスが生きておられるということを証しすることができます。

2C 神から離れた者 5-13

5 イエスがカペナウムに入られると、一人の百人隊長がみもとに来て懇願し、6 「主よ、私のしもべが中風のために家で寝込んでいます。ひどく苦しんでいます」と言った。

山から降りてこられて、それから、それほど距離が遠くないところに「カペナウム」があったのでしよう。イエス様が宣教の拠点にされたところです。そこにペテロの家があり、その家に立ち寄りながら、その周辺を中心に働きをされました。ガリラヤ湖の北の湖畔にある町です。その周辺に、コラジンがあります。そして少し西に行けば、ベツサイダがあります。カペナウムの東にゲネサレ平野が広がっています。この地域を、「伝道三角地帯」としばしば呼ばれます。そして、「カペナウム」は「ナホムの村」という意味です。あの預言者ナホムと同じ意味です、慰めという意味です。

そして以前も話しましたが、カペナウムは、ヴィア・マリスという海沿いの道、エジプトからメソポタミアまでをつなぐ国際幹線道路が走っている町の一つです。この町から北上して、ダマスコに行きます。ゆえに、人々の往来が多くあったところであり、取税所があつてそこにマタイがいました。そして、ローマ軍の駐屯地にもなっていました。そこで、百人隊長が出て来るのです。らい病人の次は、ローマの百人隊長でした。らい病人はイスラエルの家から、その汚れによって引き離されていましたが、異邦人は元々、引き離されています。しかし、彼が近づき、そしてその僕が癒されたというところに、既に主なる神が、神から引き離されている者たち、異邦人たちをご自分の御国に入れたいという思いが与えられていることを知ります。

「中風」という病気は、身体的な機能を麻痺させる脳の疾患です。口や手足の機能が麻痺して、様々な行動ができなくなり、仕事ができなくなり、それで生きる意欲が削がれます。このままでは、彼はローマ兵として働けなくなります。したがって、ここでは身体的な病だけでなく、精神的な苦しみ、経済的なもの、社会的なものも全てが奪われてしまった苦しみであります。

7 イエスは彼に「行って彼を治そう」と言われた。8 しかし、百人隊長は答えた。「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒やされます。9 と申しますのは、私も権威の下にある者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」

イエス様は、「行って彼を治そう」と言われています。けれども、他のイエス様の行動を観察すると分かるのですが、すべて人の心を知っておられる方は、その人の心にあること、その信仰を引き出すために試すために、そう言われることがあります。同じく異邦人で、カナン人の女のことを思い出してください。彼女に対しては、悪霊につかれている娘について、「イスラエルの失われた羊以外のところには、遣わされていない。」と初めから断られたのです。けれども、実は織り込み済みで、彼女の心のうちにある、主に対する信仰を引き出すためにそう言われたのです。ここでイエス様は当然、ユダヤ人が、どんなにユダヤ人を愛し、神を敬つてしようと、異邦人の家の中にユダヤ人が入るということについて、彼らの理解は付いて行けないことをご存じでした。ペテロがコルネリウスの家に入ることが、一大事のことであったことを私たちは先週、学びました。それで、百人隊長は、「あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。」と言います。

けれども、「主よ」と彼は呼んでいます。らい病人と同じように、彼もまたイエス様が、天の御国の王であり、全権者であることを知っていたのです。そして午前礼拝で話したように、権威系統について、その職業柄、よく知っていた人です。そして、イエス様の言葉にこそ、御国の力と権威の元手になっていることを知っていました。

私たちには、教えを聞く時に段階があります。第一に、それを理解する段階です。知的に、論理的に理解しているかどうか？ということですが、第二に、それを感情をもって受け入れられるぐらい理解しているということですが、それに感動するということですね。第三に、それを、意志をもって適用できるかどうか？ということですが、つまり、その教えに従うことを決められるかどうかであります。多くの人が、第一と第二の段階で終わっていますが、それでも第三の段階にまでくる人たちもいます。けれども、神の世界、神の国では第四の段階があります。それは、「霊をもって捧げている」ということです。これは単なる意志ではなく、神がその人の霊に語りかけ、そしてその人が自分の全てを神に任せるほど、神に自分を頼り切る、子供のように任せるということです。これによって、主役は自分ではなく、神ご自身になります。神がその人を選ばれたのであり、その人が神を選んだのではないということが実現します。イエス様の言葉、神の言葉を聞く時に、御霊による促しや導きを受けて、自分をそれに従わせるということが出来るのは、自分が権威の下にいることを知っているかどうかにかかっています。テサロニケの信者たちは、新しい信者であったにも関わらず、その信仰の働き、愛の労苦、そしてイエス様への希望について、その地域全体に良い噂が広まっていました。それは、彼らの御言葉の聞き方にありました。「1テサ 1:6 あなたがたも、多くの苦難の中で、

聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました。」「2:13 あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを聞いたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」

10 イエスはこれを聞いて驚き、ついて来た人たちに言われた。「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。11 あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。12 しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」

イエス様は、驚かれました。その本質を見極めて、そのまま語ってくれた人が、イスラエル人ではなく異邦人だったからです。その反対に、ナザレの会堂に行かれた時は、その不信仰に驚いておられました。こんなに見聞きしているのに・・・という驚きです。イエス様は福音書で、何度となく信仰のない世代について嘆いておられましたが、そうですね、信じるということ、消極的ではなく、積極的に、能動的に信じるということがない世代を嘆いておられました。しかし、ここではその反対、異邦人であるのに、イスラエルにない信仰を見ておられたことです。

そしてイエス様は、ユダヤ人が異邦人の信仰を認められたということで、反発が来ることを予想しておられました。ユダヤ人にとって、またその生まれがユダヤ人だということで救われる、神の国に入れるものと思っていたけれども、異邦人はユダヤ教に改宗しなければ入れないと信じていました。それで、イエス様は信仰がなければ、ユダヤ人であっても御国に入れなことを、ここで明確に言われています。「食卓につく」というのは、御国で行うことです。すばらしいですね、御国においては、大いなる宴会、祝宴が待っています。それから、「アブラハム、イサク、ヤコブと一緒に」とありますが、まさにこれはユダヤ人の父祖です。今でもユダヤ人は、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と、神を呼び求めます。けれども、彼らのところに来ているのは四方からの異邦人です。けれども、御国に入るはずの子ら、つまりユダヤ人が外の暗闇に放り出される、つまり地獄に行ってしまうということです。

13 それからイエスは百人隊長に言われた。「行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」すると、ちょうどそのとき、そのしもべは癒やされた。

今、お話しましたように、イエス様は信仰を求めておられます。その人の求めに応じて、ご自分の御業を行われることを喜びとしています。強いて、人に救いや癒し、愛の行いをすることはありません。その人の自由意志を尊重されるからです。

3C 女 14-15

14 それからイエスはペテロの家に入り、彼の姑が熱を出して寝込んでいるのをご覧になった。15 イエスは彼女の手に触れられた。すると熱がひき、彼女は起きてイエスをもてなした。

カペナウムに入られて、他の福音書によると会堂にも入られますが、その後でペテロの家に行かれます。そこで、「彼の姑が熱を出して寝込んでいるのをご覧になった」とあります。ペテロには妻がいたことは、コリント第二にもパウロが示唆しています。ここにおいても、意外な人だったのです。女です。聖書には、女を神が用いられている話が多く出てきますが、それは人間の文化の中では男性中心になっているからです。新約聖書において、それがさらに際立っています。イエス様は、女にも触れられました。当時の文化では、考えられもしなかったことです。それは、異性に対する恥じらいではなく、一種の差別意識があったからです。前回学んだ、使徒 16 章においても、マケドニア人の助けてという呼びかけに回答したパウロは、実はルディアという女性だったことを見ましたね。ガラテヤ書には、「・・・男も女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。(3:28)」とあります。もちろん、男と女の間には秩序があります。コリント第一でも、テモテ第一でも、同じパウロが、女が慎み深くすることについて教えています。けれども、午前礼拝で話したように、権威系統は上下関係のことではありません。

そして、ここでイエス様が祈られた後に、「彼女は起きてイエスをもてなした」とあることに注目してください。イエス様の宣教旅行には、大勢の女たちがついて来て、他の弟子たちの必要も含めて仕えていました。その女たちが、イエス様の十字架の最後を見届け、また復活されたことの第一の証人となりました。熱病を癒されたということから、主に仕えます。つまり、神の恵みによる救いを体験してから、その体験が奉仕をし、仕える動機となっています。

2B 身代わりの病 16-17

16 夕方になると、人々は悪霊につかれた人を、大勢みもとに連れて来た。イエスはことばをもって悪霊どもを追い出し、病気の人々をみな癒やされた。17 これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。「彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った。」

イエス様の宣教が、癒しや、悪霊の追い出しが前面に出ていることに、少し違和感を抱く人がいるかもしれません。なぜなら、教会における宣教の現場は、罪の赦しの宣言が中心になっているからです。その要となっているのが、ここでのマタイの記述です。イザヤ 53 章において、傷を負っているということが、肉体における傷であり、また罪や咎の赦しとしても話しているからです。イエス様が行われている癒しの業は、実は救いの業であり、肉体の癒しも約束していれば、本質的なところにある癒し、すなわち罪の赦しも話しているのです。ペテロは、同じ箇所を第一の手紙でこのように引用しています。「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒された。」

(2:24) この打ち傷とは、十字架における手足に釘を打たれる打ち傷もありますが、それだけでなく、鞭打たれた打ち傷もあります。これらは、肉体における苦しみであり傷であり、それがそのまま、肉体の癒しと平安の約束でもありますが、罪の赦しと平安の約束でもあります。

イエス様の働きは、このように「身代わり」というものです。病を治されるのですが、それをご自身が身に受け、病の人となり、打ち傷を受けることによって、それを治されるという働きです。私たちがイエス様に仕えるという務めは、人々の傷や罪がイエス様の上に置かれるように導く働きです。そして私たち自身の間に、肉体の弱さの中におられるイエス様を認め、イエス様の平安が広がっていくという世界です。あと、最後に忘れてはいけないのは、マタイはやはり、ここでも「ことばをもって悪霊どもを追い出し」と、言葉を強調されました。

2A 向こう岸 18-34

1B 弟子の問題 18-22

18 さて、イエスは群衆が自分の周りを見ているのを見て、弟子たちに向こう岸に渡るように命じられた。

イエス様は、焦点を弟子に向けられます。ずっと群衆の中で仕えておられましたが、弟子たちに向こう岸に渡るように命じられました。ここで「向こう岸」というのは、ガリラヤ湖の東です。イエス様と弟子たちは、マグダラのマリヤの出身のマグダラ辺りからベツサイダまでで活動しておられました。地図で確認していただければいいのですが、マグダラは北西のガリラヤ湖畔の町です。それより南に行くと、ティベリアがあり、ヘロデ・アンティパスが建てました。ヘロデがイエス様を狙っていたという記事があるように、そこまで行ったら危険です。また北東にベツサイダがありますが、それより東に回りますと、そこは「デカポリス」地方に入ります。それはギリシア時代からの十の自由都市の連合であり、異邦人が主体の地域です。イエス様が向こう岸と言われたのは、その異邦人が主体の地域の岸辺のことを指しています。なぜ、そちらに行くのか？弟子たちと共にプライベートな時間を過ごしたいからです。群衆が付いてくることのない所に行かなければ、弟子たちと時間を過ごすことはできません。私たちも、イエス様について行く者として、イエス様にあってじっくりと時間を過ごす必要がありますね。修養会もそうですし、ちょっとした旅行、あるいは、まったりと時間を過ごすこと、大事です。

19 そこに一人の律法学者が来て言った。「先生。あなたがどこに行かれても、私はついて行きます。」20 イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」21 また、別の一人の弟子がイエスに言った。「主よ。まず行って父を葬ることをお許してください。」22 ところが、イエスは彼に言われた。「わたしに従って来なさい。死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。」

向こう岸に渡ろうとしたら、対照的な二人が出てきました。とても興味深いです。一人は、「律法学者」です。聖書のことばをしっかりと学んでいる学者であります。イエス様が、すぐれた教師、ラビであることを認めているのです。ぜひ、お供をしたいと思いました。弟子になりたいと思いました。けれども、熱心に学習していく、聖書を学んでいるということが、必ずしもイエス様について行くことではないことを、イエス様の言葉が物語っています。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところありません。」と言われます。聖書で、狐も、また空の鳥も、あまり高くは評価されていない動物です。けれども、住まいがあります。けれども、ご自分は、人の子は枕するところがない、ということです。つまり、「費用を計算しなさい」ということです。自分がイエス様について行って、自分を捧げたい、献身したいと衝動的に思っても、弟子として生きていくことについて、十分に犠牲や代償を考えた上で付いて来なさいと言われました。

けれども、それは思い煩いのことではないのです。もう一人の弟子は、律法学者と違って、先生ではなく、「主」と呼んでいます。すべてを明け渡しているはずなのです。ところが、「まず行って父を葬ることをお許しください」と言っています。これは、今、父の葬儀があることを示していません。父はまだ生きています。けれども息子の務めとして、父を葬るところまで父に従い、それからあなたに従わせてくださいとお願いしているのです。けれども、イエス様は、「そうしたことは、まだ霊的に生きていない人々、信仰を持っていない人々に任せなさい。」とされています。世にあるいろいろな責任があります。こうしたことを考えたら、イエス様に仕えることができない理由は、山ほど出てきます。そういったことは、そういったことを気にしている人々、つまりまだイエス様を自分の主としていない人々に任せればよいのだ、と言うことです。イエス様は似たようなことを、「カエサルのは、カエサルに返しなさい。主のものは、神に返しなさい。」というところで言われました。要は、神の御国のために、これらのことは軽く付き合うのです。

ですから弟子になる道は、二段階です。犠牲を考えます。費用をじっくり考えて、その上でイエス様について行きます。けれども、思い煩いませぬ。主がこの世のことは、何とかしてくださる、世話をしてくださるのです。

2B 闇に対する力 23-34

確かに、イエス様は弟子たちに、ある意味で費用を払わせて従わせています。次に出て来る出来事は、彼らにとって試練でした。一つは、自分の命が危うくなる経験です。大波の中で舟が沈みそうになるのです。そしてもう一つは、悪霊につかれた者たちとの遭遇です。これも霊的に、ものすごいストレスと疲れをもたらします。しかし、それは同時に、イエス様が闇に対する力を現し、この方がどれだけのお方なのを知る、大きな体験となるのです。

1C 荒波 23-27

23 それからイエスが舟に乗られると、弟子たちも従った。24 すると見よ。湖は大荒れとなり、舟

は大波をかぶった。ところがイエスは眠っておられた。25 弟子たちは近寄ってイエスを起こして、「主よ、助けてください。私たちは死んでしまいます」と言った。26 イエスは言われた。「どうして怖がるのか、信仰の薄い者たち。」それから起き上がり、風と湖を叱りつけられた。すると、すっかり凪になった。

イエス様が、弟子たちの用意した舟に乗られました。ところが、湖が大荒れです。ガリラヤ湖の周辺は、このような強風が起りやすいところです。ヨルダン溪谷の一部になっているので、そこだけがとても低くなっているのです。気温の差で強い風が吹きやすいのです。ところが、「イエスは眠っておられた」とあります。凄いですね、弟子たちは自分たちが死んでしまうと叫びます。けれども、イエス様の言葉は、厳しいものでした。「どうして怖がるのか、信仰の薄い者たち。」であります。信仰が薄い？だって、舟が沈みそうなのに、イエス様はぐっすり眠っておられるのです。思い出すのは、マルタとマリアの話ですが、マルタがイエス様をお迎えするために給仕をしていて、マリアはイエス様の足元で御言葉を聞いていますが、マルタがマリアのことで、イエス様に非難めいたことを言いました。イエス様が、しなければいけないことをそのままにしておかれている、それは酷いではないか、ということです。しかし、マリアは正しいことを選んだと言われました。ここでは、イエス様は弟子たちが、「信仰が薄い」と言われるのです。

なぜか？「向こう岸に渡るように命じられた」のです。これまで見てように、らい病も、中風も、熱病も、また数々の悪霊も、イエス様の命令によって出て行きました。ならば、イエス様が向こう岸に渡るということも、その命令は必ずその通りになるのです。私たちの信仰の訓練です。主が約束し、命令しておられるのに、目の前にある問題や課題に直面し、自分たちがイエス様の言葉を忘れてしまっているのに、「イエス様何とかしてくださいませんか！」と叫んでしまっているのです。弟子になるということは、このような犠牲が伴います。けれども、その試練に対してイエス様が、生きておられ、勝利してくださるということも同時に体験できるのです。ダビデは、試練の中であって、自分に救いが無い状況の中であって、それでもゆっくりと眠ったという証しをしています。詩篇 3 篇です、「1【主】よなんと私の敵が多くなり私に向かい立つ者が多くいることでしょうか。2 多くの者が私のたましいのことを言っています。「彼には神の救いが無い」と。セラ 3 しかし【主】よあなたこそ私の周りを囲む盾私の栄光私の頭を上げる方。4 私は声をあげて【主】を呼び求める。すると主はその聖なる山から私に答えてくださる。セラ 5 私は身を横たえて眠りまた目を覚ます。【主】が私を支えてくださるから。」ここまで、イエス様に頼り切ることができるか、自分の救いと命を任せきることができるか？私たちの信仰には、訓練が必要です。

そして、先に夕方になっていたという記述があったので、もはや夜遅くなっていました。夜に、大荒れの水の中にいます。聖書には、国々が騒ぎ立つ時に荒れ狂う海としての幻が書かれています。「私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。(7:2)」イエス様は、この小さなガリラヤ湖というところで、私たちの生活の中で起こること、また世界的に起こること

と、終わりの日についてのことも、教えておられるのでしょう。闇の力が襲って来ようと、死の力が襲って来ようと、そこには主がおられて、主は救いの力を、復活の力を示されるということです。

27 人々は驚いて言った。「風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

そうです、ユダヤ人にとって、ここまで自然界の力を制する方は誰なのか？と思っています。大波のような制御しがたい力に対して、それを制圧できるのは神にしかいないという信仰が与えられていました。エリヤのように、自然界に対して雨をやめさせるような祈りを捧げることはできるでしょう。けれども、大荒れについては、それは神のみが御座におられて、支配し、制圧することができます。私たちの周りでも、自分ではどうすることもできない大波、それをイエス様は制することができますのです。

2C 悪霊 28-34

28 さて、イエスが向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人が二人、墓場から出て来てイエスを迎えた。彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった。

「ガダラ人の地」であります。今、ガリラヤ湖畔を回りますと、東側にビザンチン時代の教会の遺跡が残っています。そこを今は「クルシ」と呼んでいます、その坂を豚が湖になだれ込んでいったところであろうと考えられます。当時の遺跡には、ユダヤ人が僅かに住んでいた形跡があり、壁でしっかりと家を取り囲んでいたそうです。なぜなら、ガダラはデカポリスの地域であり、そこは多くが、異邦人が住んでいたところだからです。

そして、「悪霊につかれた人が二人、墓場から出て来てイエスを迎えた」とあります。「迎えた」とありますが、歓迎したということではもちろんありません。対峙したということです。そして、墓場はユダヤ人には、死者に触れるならば汚れるとされていますから、近づかないところです。そうした汚れているとされる場所に、悪霊が人に取りついて、凶暴になっていました。私たちは、なかなかこういった光景を見ることはありません。けれども、私は数多くの人から、実際に悪霊を追い出ないといけなかったという証言を、クリスチャンの兄弟たちから聞きました。今でも、霊媒の影響が強いところでは、人間の力では到底できないようなことを行うことがあります。そして、当時の社会は、オカルトが今よりも、ずっと浸透していました。沢山の偶像の宮があり、医療においても蛇の神が拝まれ、オカルト的なことを行っていました。それゆえ、異邦人だけでなく、ユダヤ人の中にも魔除けのようなことをする者たちがいました。バルナバとパウロが、キプロスに行った時に、バルイエスという魔術師がいたことを思い出してください。このように、イエス様が地上で現れていた頃は、霊的にも圧迫されていた時であったということです。

また、イエス様が地上に現れたということは、これら悪の霊的勢力がこれまでも増して、反対していたことも考えられます。黙示録 12 章 4 節には、竜が、「天の星の三分の一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした。」とあります。イエス様を滅ぼすためにです。私たちがイエス様に付いて行けば、今まで知らなかった霊の世界を見せられるかもしれません。悪の勢力が如実に表れているのを見るのです。

29 すると見よ、彼らが叫んだ。「神の子よ、私たちと何の関係があるのですか。まだその時ではないのに、もう私たちに苦しめに来たのですか。」

イエス様は、地上においては「人の子」であられました。へりくだった方、他の人間と変わらずに生活しておられた方です。しかし、霊の世界に生きている悪霊どもは、もちろん知っています。「神の子よ」と叫んでいます。イエス様は、このことを徐々に示していかれます。そして復活によって、公にお示しになられます。ご自分は神の御子であり、神ご自身なのだということです。彼らの叫びは、「私たちと何の関係があるのですか。まだその時ではない」というものです。これは、悪霊どもは自分たちの定めを知っているということです。ユダの手紙 6 節に、「またイエスは、自分の領域を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。」とあります。その時がまだ来ていないのに、どうして今、このように対峙するのか？と問うているのです。

興味深いのは、彼らはイエスが神の子であると知っているのに、もちろん救われていない、従順ではないということです。知識として知っているというだけでは、意味がないことをヤコブが教えています。「あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。(2:9)」知識において信じているだけでは不十分なのです。神の権威の下に自分を入れる、つまり従順になるというところまでなければ、まことの知識に至りません。

30 そこから離れたところに、多くの豚の群れが飼われていた。31 悪霊どもはイエスに懇願して、「私たちを追い出そうとされるのでしたら、豚の群れの中に送ってください」と言った。32 イエスは彼らに「行け」と言われた。それで、悪霊どもは出て行って豚に入った。すると見よ。その群れ全体が崖を下って湖になだれ込み、水におぼれて死んだ。

「多くの豚の群れが飼われていた」というところに、ここが異邦人が大半の地域であることが分かります。ユダヤ人は、律法によって豚は汚れた動物であり、食べてはいけないとみなされているからです。そして、悪霊どもは、豚の中に送ってくれと懇願しています。悪霊は、霊でありますから、住むべき体を欲しているということです。それで、イエス様が「行け」と命令を与えられたら、豚に入りました。イエスに反抗している悪霊どもも、イエスの主権、その権威と力に従わざるをえない存在なのです。そして、豚がガリラヤ湖の中に水に入り、溺れて死にました。

ここに、象徴的な出来事があります。聖書の中には、海の底、その深みを罪が蓄積されているところ、陰府の門とされています。ミカ書の最後には、罪が海の底に投げ込まれるようにという祈りがあります。ヨナは魚の中で海の底にまで行き、そこが陰府の門であることを話しました。ですから、ここでも弟子たちは、ただこの出来事を見ているのではなく、自分たちの宣教で経験すること、すなわち悪霊どもが縛っている状況の中で、人々を福音の中へ導き、解放されていくということを経験します。イエス様は、闇の力が支配しているところに来られて、その中でご自分の命をもって支配する働きを行われます。私たちも、その中に召し入れられているのです。

33 飼っていた人たちは逃げ出して町に行き、悪霊につかれていた人たちのことなどを残らず知らせた。34 すると見よ、町中の人々がイエスに会いに出て来た。そして、イエスを見ると、その地方から立ち去ってほしいと懇願した。

イエス様によって、悪霊の仕業がどこかに行ってしまったのに、それをかえって望まないのが、地元の人々でした。それは、自分たちの豚ビジネスを台無しにされたからです。人の命や尊厳よりも、また悪霊の仕業がなくなるよりも、ビジネスの方が大事だったのです。いかがでしょうか、私たちの生きている世界も、罪が取り除かれ、苦しみを取り除かれることよりも、今のままのほうがよいと現状維持を望む心の頑なさがあります。

このようにして、弟子たちは他の群衆以上に、イエス様からその言葉にある権威と力を、見ることになりました。自然界における力、そして霊の世界における力です。ここで、私たちの間にイエス様が生きておられることを信じるなら、このような驚きがあるということです。自分や自分の周りの状況が、福音のゆえに変えられることを望みますか？それとも、今の自分の生活が変えられることを恐れ、そのまま続けたいと望みますか？